密教思想の日本的展開
——即身成仏を中心に——

亀山隆彦

課程博士学位申請論文の要旨を述べるにあたり、以下に目次を挙げる。

目次

序論
本論の目的と方法／先行研究にみる密教思想の日本的展開と即身成仏／覚鑁独自の即身成仏思想の意義／論文の構成と各章の概要
本論
第一章　日本密教における即身成仏思想の形成
はじめに
第一節　日本伝来以前の即身成仏思想
第一項　問題の所在／第二項　『法華文句記』における即身成仏／第三項　『菩提心論』における即身成仏／第四項　『菩提心論』における密教観法／第五項　『大日経疏』における五字厳身観／第六項　小結
第二節　空海の即身成仏思想
第一項　問題の所在／第二項　『即身成仏義』以前の著作にみる即身成仏思想／第三項　『即身成仏義』における即身成仏思想／第四項　空海の著作における密教観法の意義／第五項　小結
第三節　天台密教における即身成仏思想
第一項　問題の所在／第二項　最澄の即身成仏思想／第三項　義真・徳円・光定における即身成仏理解／第四項　円仁における即身成仏と肉身の捨・不捨／第五項　安然における即身成仏と密教観法／第六項　小結
第四節　真言密教における機根論の展開
第一項　問題の所在／第二項　『真言宗即身成仏義』における即身成仏と大・小二機／第三項　覚鑁における即身成仏と大・小二機／第四項　鎌倉期真言密教における大・小二機と一生・二生成仏説／第五項　『大疏百条』における機根論／第六項　小結
まとめ
第二章　覚鑁独自の即身成仏思想と五臓三摩地観
はじめに
第一節　覚鑁の生涯と著作
第一項　覚鑁の伝記と生涯／第二項　覚鑁の著作について／第三項　『五輪九字明秘密釈』の著述時期／第四項　『五輪九字明秘密釈』の構成と概要
第二節　『五輪九字明秘密釈』における五臓理解
—覚鑁の成仏論の特質として—
第一項　問題の所在／第二項　『五輪九字明秘密釈』における金剛界の五臓三摩地観／第三項　『《vaṃ》字密観』における五智種子真言の字輪観／第四項　『五輪九字明秘密釈』と『《vaṃ》字密観』の相

互連関／第五項　小結
第三節　覚鑁における心身平等説
第一項　問題の所在／第二項　覚鑁における心身の不二・即一説／第三項　『打聞集』における心身の而二・平等説／第四項　『五輪九字明秘密釈』における五臓と心の平等説／第五項　小結
第四節　覚鑁の三摩地観の意義
第一項　問題の所在／第二項　空海、覚鑁における六大と五臓の意義／第三項　三密行からみた五臓三摩地観の意義／第四項　小結
まとめ
第三章　覚鑁以降の五臓三摩地観の展開
はじめに
第一節　『五蔵曼陀羅和会釈』における草木成仏の影響
第一項　問題の所在／第二項　『五蔵曼陀羅和会釈』の成立年と著者について／第三項　『五蔵曼陀羅和会釈』における四方・四季・四行・四転・四苦の理解／第四項　『菩提心義抄』『教時問答』における草木の発心と成仏説／第五項　『草木発心修行成仏記』における草木の発心と成仏説／第六項　小結
第二節　『五智蔵秘抄』にみる《a》字と両部不二思想
第一項　問題の所在／第二項　『五智蔵秘抄』の成立年と由来／第三項　『五智蔵秘抄』における《a》字理解／第四項　『五智蔵秘抄』における両部不二思想／第五項　小結
第三節　中世真言宗における命息思想の展開
―『宗骨抄』を中心に―
第一項　問題の所在／第二項　『宗骨抄』「流来生死大事」における即身成仏と命息／第三項　『瑜祇経秘決』における命息思想／第四項　『灌頂印明口決』における命息思想／第五項　小結
第四節　『秘密念仏鈔』における五臓三摩地観の影響
第一項　問題の所在／第二項　『秘密念仏鈔』における命息思想の影響／第三項　『秘密念仏鈔』における五臓三摩地観の影響／第四項　小結
結論

序論

紀元七・八世紀のインドに端を発するとされる中期密教の思想は、おなじく八世紀の内に、善無畏（六三七～七三五）、金剛智（六七一～七四一）といったインド僧の手で中国へ伝えられ、その後、九世紀の初頭に日本へ請来される。空海（七七四～八三五）、最澄（七六六／七六七～八二二）、円仁（七九四～八六四）等、平安初頭期の入唐僧が、その請来の任にあたった。さらに中国に伝えられた中期密教の伝統が、唐末には途絶してしまうのと対照的に、日本へ渡ったそれは、真言・天台両密教の名のもと、平安・鎌倉・室町時代を通じて隆盛を維持し、その中からインド・中国の何れとも異なる、日本独自の密教思想が生み出される。右に名を挙げた僧に加え、おなじく平安初期に登場する安然（八四一～没年未詳）、あるいは平安末期の覚鑁（一〇九五～一一四三）が、その日本独自の密教思想を生み出す上で、特に大きなはたらきをした人物とみなされる。これら僧が残した教説を検討し、密教思想の「日本的展開」、その独特の成仏思想の展開を明らかにすることが、本論文の目的である。

先行研究でもたびたび指摘されるように、インド・中国の密教には確認されない日本密教に独自の教理として、①密教経論の記述に基づき樹立された教判、②従来の速疾成仏とは一線を画す即身成仏

の思想が挙げられる。[1] 右に述べる日本密教に独特の成仏思想とは、すなわち後者の即身成仏思想を指す。つまり本論文は、日本密教における即身成仏思想の展開を明らかにするものである。さらに先行研究によれば、日本密教における即身成仏思想の展開には、空海に端を発するものと最澄に端を発するものの二つがあり、円仁や安然等、後の天台密教僧の即身成仏に関する主張は、後者の一部、覚鑁や頼瑜（一二二六～一三〇四）といった真言密教僧のそれは、前者の一部と理解されるという。[2] そのような先行研究の見解に対して、即身成仏思想の展開にはもう一つ、覚鑁に端を発するものがあったと考えられること、そして密教思想、少なくともその成仏思想に関しては、平安初期の空海・最澄のそれに類する重大な転換が、平安末期の覚鑁においても生じていると考えられることを、本論文では明らかにした。

本論

目次に示した通り、本論は、以下の三章より構成される。

第一章　日本密教における即身成仏思想の形成
第二章　覚鑁独自の即身成仏思想と五臓三摩地観
第三章　覚鑁以降の五臓三摩地観の展開

このなか第二・第三の二章において、平安末の覚鑁に端を発する即身成仏思想の展開を論じている。それに先立ち第一章では、密教の導入期にあたる、平安初頭期の日本における即身成仏思想の動向、主として、空海に端を発する即身成仏思想の展開について考察を試みた。

つづいて、本章を構成する四節それぞれの内容を紹介しておくと、第一節では、空海・最澄に先んじて存在していた『菩薩処胎経』、『菩提心論』、『法華文句記』といった文献中に確認される「即身成仏」の語義を検討し、それが衆生の現生・速疾の成仏と同義、文脈によっては、その言い換え表現の一つともみなされることを指摘した。この第一節の指摘を踏まえ、つづく第二節では、先行する文献の理解に対する空海の即身成仏思想の特質を明らかにした。すなわち『即身成仏義』の中、体（六大）・相（四曼）・用（三密）の三大の組織を詳しく述べる一方で、即身成仏の「身」を、衆生の現在身から仏身をも含む「六大法界体性所成之身」と解釈し、さらにそれら身の無礙相即の関係をもって、「即身」と理解することで、おなじく即身成仏の語に、「当体即成仏」、ないし「凡聖不二」の意味を付与していることを指摘した。

第三・第四の二節では、第二節でとりあげた空海の即身成仏思想が、同僧の没後いかなる形で受容され、展開していくかについて考察を行っている。第三節では、平安初期の日本天台宗において盛んであった即身成仏に関する教学議論を総括し、そこにおける空海の

即身成仏思想からの影響を指摘している。第四節では、『真言宗即身成仏義』中の大小二機の教説に端を発する、真言密教における機根論の展開を検討し、この機根論の展開を通じて、「当体即成仏」、「凡聖不二」、そして現生・速疾の成仏であるはずの即身成仏に、「速」と「遅」、「頓」と「漸」、「現証仏菩提」と「後十六生成正覚」、そして「一生成仏」と「二生成仏」の別が設けられることを明らかにした。

第二章　覚鑁独自の即身成仏思想と五臓三摩地観

第二章では、「五蔵（臓）三摩地観」と呼ばれる密教瞑想法を通じて明確な形を与えられることになる、覚鑁に独自の即身成仏思想について考察を行った。覚鑁は、主要著作と目される『五輪九字明秘密釈』の中、即身成仏に関する「大事」、あるいは「秘之中ノ秘」説と言明して、この五臓三摩地観を説き示す。本章では、覚鑁が説示した五臓三摩地観の密教瞑想法としての基本構造、および思想基盤を詳述した上で、その即身成仏思想としての意義を論究した。

つづいて、第二章を構成する四節それぞれの内容を紹介しておくと、第一節では、『霊瑞縁起』や『密厳上人縁起』といった伝記の記述を踏まえて、覚鑁の生涯を概観し、さらに『五輪九字明秘密釈』の著述時期と、「択法権実同趣門」以下の十門の構成を詳らかにした。つづく第二・第三節では、その覚鑁『五輪九字明秘密釈』に説かれる五臓三摩地観が、いかなる思想基盤の上に成立した密教瞑想法なのか明らかにした。すなわち第二節では、『五輪九字明秘密釈』の五臓三摩地観と、覚鑁『[illegible]《vaṃ》字密観』中に教示される「大乗観」を比較することで、先行研究で指摘される五字厳身観に加え、字輪観と称される密教瞑想法もまた、五臓三摩地観の本拠とみなされることを指摘した。一方第三節では、『五輪九字明秘密釈』中の「心」と「五蔵」の平等に関する主張と、覚鑁の談義の記録である『打聞集』中の「心」と「身」の平等に関する主張を比較検討することで、覚鑁独自の心身関係論、すなわち心身間の而二・平等説が、『三種悉地軌』中の各種教説と共に、五臓三摩地観の肉付けに大いに関わっていることを明らかにした。

さらに第四節では、空海『即身成仏義』中に主張される即身成仏の原理、および実践のメカニズムと比較することで、五臓三摩地観の即身成仏思想としての意義を闡明した。空海の即身成仏思想を踏まえて見た場合、五臓三摩地観とは、「毘盧遮那平等智身」、ないし「六大法身」として無量の功徳を秘めてはいるものの、いまだ脆弱で覚りがたく、さらに御しがたい肉身を手段として用いて、現生・速疾に成仏することと理解される。覚鑁が、同時代の浄土教思想と真言密教思想との融合を試みる一方で、以上のような独自の即身成仏思想を構想していたと考えられることを、この第四節で指摘した。

第三章　覚鑁以降の五臓三摩地観の展開

第三章では、覚鑁が即身成仏の「大事」、または「秘之中ノ秘」

説と述べる五臓三摩地観の、同僧以後の受容・展開を考察した。具体的には本五臓三摩地観が、平安末から鎌倉時代にかけての草木成仏、ないし秘密念仏の展開にいかなる影響を及ぼしているか、逆にそれら思想の展開からいかなる影響を被っているかについて検討を行った。

つづいて、第三章を構成する四節それぞれの内容を紹介しておくと、第一節では、安然の『菩提心義抄』や『教時問答』中に説き示される草木成仏が、寛慶（生没年未詳）『五蔵曼陀羅和会釈』中の五臓三摩地観解釈に与えた影響、さらに『五蔵曼陀羅和会釈』中の同解釈が、『草木発心修行成仏記』中の草木の発心・修行・成仏説に与えた影響を詳らかにし、五臓三摩地観と草木成仏との間の相互の影響関係を指摘した。

つづく第二節では、鎌倉時代に製作された五臓三摩地観の註釈書である『五智蔵秘抄』中に確認される、五臓三摩地観より多大な影響を被った独自の𑖮《a》字理解、および法界観を明らかにした。

第三節では、中世期の真言密教で盛んに説かれた命息思想の起源を考察し、それが秘密念仏ではなく、実運（一一〇五～一一六〇）、勝賢（一一三八～一一九六）、成賢（一一六二～一二三一）、憲深（一一九二～一二六三）の順で相承された醍醐寺三宝院流の口伝・秘事の中にあることを指摘した。その結果を踏まえ、つづく第四節では、道範（一一七八～一二五二）『秘密念仏鈔』に独自とされる、行者の息をもって両部不二の不断念仏とし、おなじく息の風をもって阿弥陀仏の体とする理解の背景に、右記の命息思想と、『五輪九字明秘密釈』の五臓三摩地観があることを指摘した。

結論

序論で述べたように、密教思想、少なくともその成仏思想に関しては、先行研究で強調される平安初期の空海・最澄のみならず、平安末期の覚鑁においても、前者に匹敵する重大な思想展開が生じている。覚鑁は、その著作中、空海・最澄・円仁・安然の何れもが明らかにしなかった、新たな即身成仏思想を教示した。すなわち本論の第二章で紹介した、「毘盧遮那平等智身」、ないし「六大法身」として無量の功徳を備えながらも、いまだ脆弱で覚りがたく、さらに御しがたい肉身そのものを観想することで、その肉身の上に仏智を実現することと理解される即身成仏である。そして、このような即身成仏思想を体現する実践が、『五輪九字明秘密釈』に説示される五臓三摩地観である。また、この覚鑁に独自の即身成仏思想、および五臓三摩地観は、さらに後代の密教僧の成仏思想、法界観や仏陀観に対しても小さからぬ影響を及ぼしている。

註

① 松長有慶『密教の歴史』（一九六九年、平楽寺書店）、および勝又俊教『密教の日本的展開』（一九七〇年、春秋社）参照。

② 第一に、空海に端を発する即身成仏思想の展開に関しては、勝又前掲書、松崎恵水「興教大師覚鑁の成仏思想」（『密教大系』巻七、一九

九五年、法藏館）、藤田隆乘「頼瑜の成仏観」（『智山学報』四二号、一九九三年）、大塚伸夫「頼瑜僧正の即身成仏思想について」（『新義真言教学の研究』、二〇〇二年、大藏出版）等参照。つづいて最澄に端を発する即身成仏思想の展開に関しては、浅井円道『上古日本天台本門思想史』（一九七三年、平楽寺書店）、末木文美士『平安初期仏教思想の研究　安然の思想形成を中心として』（一九九五年、春秋社）、大久保良峻『天台教学と本覚思想』（一九九八年、法藏館）等参照。